

日本の徐福伝承と神奈川の役割

～徐福は倭国（古代日本）に何をもたらしたのか～

1. はじめに

日本の歴史は、古事記・日本書紀の神話から始まっている。イキイキとした活動を行っている神話の神々は、人間の足跡を表現している場合が多い。即ち、人間の歴史的活動が、神話の世界に反映されているものと考えることができる。

ところで、日本人の祖となる人々には、数万年前、中央アジアやスンダ大陸から、海進によって列島化した日本列島に住みついたようである。いろいろな地域から来た種々の人々が混じり合って、縄文文化を育て、日本人の祖を形成してきたのであろう。

一方、東アジア大陸で、今から8～6千年前頃、長江流域の河姆渡遺跡を中心とした長江文明と、4、5千年前に黄河流域で文明が起こり、夏、殷、周、（戦国）、秦、漢などの国ができる。3~2000年前の激動の時代に、中国大陸から日本列島に渡来してきた人々が存在する。いわゆる弥生時代初期の列島への渡来人である。その中で、最も組織的に、大集団を組んでやってきたのが、秦の時代に渡来したと言われる徐福集団である。

本稿では、徐福集団の日本列島での活動が、如何に日本の歴史に反映されているかを、調査した結果を、考察を加えて報告する。

2. 倭国（古代日本）における徐福伝承1)

2.1. 古代日本列島への渡来者とその目的

中国大陸から3~2000年前、春秋戦国時代の激動を機に、日本列島に避難してきた人々が数多く存在する。この中に、自分たちの信仰を守るための新天地を求めて、東海の島々に到達した人々もいたと考えられる。この人たちが、いわゆる弥生時代初期の列島への渡来人である。徐福集団も一部はその担い手で、秦の始皇帝の命で、不老不死の霊薬を求めて、列島に到着したと言われるが、出身地「齊の国」では、この時既に列島の状況は既に把握できていた可能性がある。

2.2. 日本列島における徐福伝承地

秦始皇帝の時代、方士「徐福」は、不老長生の霊薬を求めて東海の3神山に向けて船出したと『史記』にいう。百工、童男童女を含む3000人を乗せた数十隻の大船団が、弥生時代の列島を目指した。徐福一行が目指したところは、蓬萊、方丈、瀛洲と呼ばれる地域である。蓬萊がどこにあったかは、各種異論があり、台湾、韓国、日本、はたまたアメリカ大陸という説まである。そして、中国、韓国、日本には徐福伝説が多数存在しており、徐福の歴史的存在性は、疑えないものになってきている。徐福伝説の存在する地は、日本に数十箇所あり、中には紀伊半島熊野や、富士山北麓吉田のよう

に、徐福の墓と呼ばれるものまでが残っている。

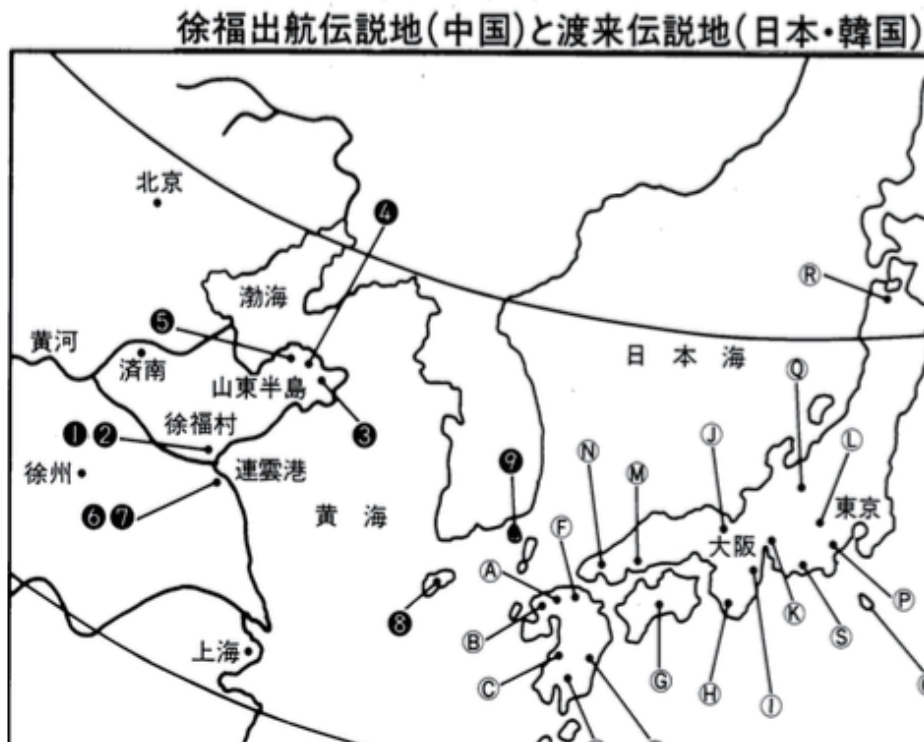
ところで、1982年に中国江蘇省連雲港市贛榆県金山鎮にある徐阜という村が清の乾隆帝の時代以前に「徐福村」と呼ばれていたという。この徐福村が学術研究者の調査により、徐福が歴史的人物であったと確認されたため、中国、韓国、日本において、徐福研究が盛んになってきた。これと並行して、日本列島でも、徐福に関する情報は、伝説、伝承、民話・言い伝え、地名、神話などの形で多く残されていたことが判明してきた。

徐福渡来の伝承は、九州佐賀、紀伊熊野、山梨県富士吉田が特に有名であるが、実は、九州、中国、四国、近畿、東海、関東、東北、北海道まで広く分布して存在している。

九州では、佐賀県諸富町、福岡県八女市、博多名島、熊本、鹿児島県串木野市、徳之島、宮崎県延岡市などに徐福伝承が存在している。中国地方では、瀬戸内海の祝島の他、山口県の土井ヶ浜遺跡が徐福集団に関連するものではないかと関心がもたれている。

近畿では、和歌山県新宮市、三重県熊野市、日本海側の京都府伊根町、丹後、近江平野等にも残っている。中部・東海地域では、名古屋市熱田神宮、東三河の小坂井町、本宮山・石巻山山麓、清水市、富士山山麓に徐福伝承がある。関東地域では、相模・丹沢山系、秦野市、伊勢原市、相模原市に徐福伝承がある。東北地域では、秋田県男鹿半島、青森県小泊にある。

北海道では、富良野、小樽に徐福関連情報がある。



3. 日本における主要な徐福伝承の詳細

中国の史書『史記』によると、始皇帝は「童男童女三千と百工、五穀とその技術を持つ人達をつれて東方に船出させた。徐福は平原広沢に着き、王となって帰らなかった、と書かれている。但し、日本のどの場所であるかがわからない。

また別の箇所「秦始皇、方士徐福を遣わし童男女数千人を入海、蓬萊神仙を求めしむも得ることをえず。徐福、誅されることを畏れ、敢えて帰らず、この洲に止まる。世々相承けて数万家あり。会稽

東治県の人、海に入りて風に遭い、流移して瀛洲に至る者あり。在る所絶遠にして往来すべからず。」と書かれている。そして、中国では、徐福の日本列島への渡行は「事実」であり、日本人の祖となったと考えられているのである。

飯野孝著『弥生の日輪』(新人物往来社)より引用

<ul style="list-style-type: none"> ㊤佐賀県 伊万里市波多(秦)津町/山内町/鎮守北大走天満宮/武雄市/有明町/諸富町寺井津/浮盃の上陸伝説/金立権現金立神社の徐福神像/佐賀市(徐福研究会) ㊦長崎県 松浦市/平戸市 ㊧熊本県 熊本市/八代市 ㊨鹿児島県 串木野市/照島/秦波止の徐福祠/島平浦/孫岳/紫尾山/頂峯院庭園/坊津町 ㊩宮崎県 宮崎市住吉町/延岡市の徐福岩 ㊪福岡県 八女市童男山古墳 ㊫高知県 須崎市/佐川町の虚空蔵山公園/紫折峠鉾ヶ峰 ㊬和歌山県 新宮市の徐福祠と徐福墓(新宮徐福協会)/太地市捕鯨伝説 ①三重県 熊野市/波田須上陸遺跡(秦槇保存会) ②京都府 丹後半島/伊根町新井崎神社の童男童女神像/河来見三番叟/冠島/加悦町施野寺 ③愛知県 熱田市蓬萊伝説/小坂井町兎足神社/御津町東三河湾上陸伝承/秦、羽田姓多し ④山梨県 富士吉田市(本文)/河口湖町徐福社の雨乞い地蔵/山中湖村浅間神社/その他古文書多数/北都留郡上野原町の不老薬伝説 ㊭広島県 宮島町巖島 	<ul style="list-style-type: none"> ㊮山口県 祝島の不老薬キューイ渡来伝説 ⑤東京都 八丈島 ㊯神奈川県 藤沢市妙善寺/三浦半島一帯 ⑥長野県 小県郡和田村(本文) ㊰青森県 小泊村尾崎神社の徐福神像 ㊱静岡県 三保の松原の羽衣伝説 ※その他各地に徐福研究会、遺跡保存会多数(新宮市、奥野利雄氏提供) ⑦江蘇省連雲港市 徐福廟/韓榆果秋水海港出航遺跡/その他多数 ⑧韓嶺馬站郷小王坊村 徐福船団造船遺跡 ⑨黄県郷城鎮東村 徐郷城故城遺跡/徐福の故郷遺跡 ⑩山東省竜口市城東郊 登エイ門/徐福船団出航地 ⑪黄県羊崖郷黄河營村 黄河營の古港遺跡/徐福船団出航遺跡 ⑫瓊邪台 青島市膠南県礼日亭海人廟 ⑬瓊邪港 出航遺跡/始皇帝接見地/その他 ⑭済州島 船団通過/補給遺跡/残留三姓穴伝説/その他 ⑮巨済島 通過伝説 <p style="text-align: right;">(「人民中国誌」提供)</p>
---	--

3.1. 九州の徐福伝承

1) 佐賀：日本各地に徐福伝承が残るが、最も合理的に理解できるのが「平原広沢」の地、佐賀という説もある。徐福には、長男の徐市、次男の徐明、三男の徐林そして四男の徐福（同名である別人か）という四人の子供がいたとの説がある。佐賀の金立神社に残る伝承によると、祭神は「金立大権現」(徐福)と言われている。

三男の徐林が童男童女、百工ら七百人あまりを引き連れ佐賀の地に移住し、神社には徐林が祭られているともいう。また、次男の徐明は金華山をめざして熊本地方に移住したとなっている。徐福と長男の徐市はさらに蓬萊山を求めてシラヌヒ海から、紀州に至り、徐福はこの地(紀州の古座)に留まったが、長男の徐市はさらに東をめざし、スルガ国に至って蓬萊山(富士山)を見つけたとの伝承も残っている。佐賀市金立町にある金立神社には、徐福が佐賀郡諸富町の浮盃江に上陸しようとしている情景を描いた「金立神社画図縁起」が収められている。



図1 「金立神社画図縁起」

徐福を祀る金立神社のご神体は「巨石」であるが、これは道教との関係が考えられる。

佐賀県の吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の環濠集落であるが、墳墓には遺体が甕棺に入れられている。不老不死を願う神仙思想が反映されているようであり、元佐賀テレビ役員の故内藤氏は徐福一行につながる遺跡と見て、著書を上梓されている。故池田仁三氏は、古墳の墓誌を解読され、徐福集団の1人・天津国玉日子という統治者であったとの見解を出しておられる。池田仁三氏は、童男山一号墳石室墓碑名をコンピュータ画像処理によって解読したところ、その墓碑名から八女市東部の童男山古墳群において徐福一族の墓と出会い、徐福日本渡来が真実であったことを実証したとされている。

2) 鹿児島県串木野：鹿児島県串木野市の西に東中国海を望む冠岳があり、ここには徐福伝説があり、「頂文院文書」によれば「熊野権現扶桑初降の霊地」とされている。串木野で、徐福は封禪（ホウゼン）の儀式を行ったと考えられている。

3) 徳之島：徐福一行が記載したと思われる、石碑がある。徐福一行が、九州に到着する以前の地として、琉球や奄美地域がある。

4) 宮崎県延岡市：徐福岩と呼ばれる石柱が存在している。徐福一行は渚にあったこの徐福岩に船を繋ぎとめて上陸したと記載されている。一方、延岡の西方、高千穂地域にある幣立神宮には、秦始皇帝が不老不死の水をこの地に求めたという看板が立っている。春木宮司に伺うと、徐福は秦始皇帝の命により、不老不死の霊薬を求めてこの地に来たが、その後富士山の方に行ってしまったと伝えられている。この神宮には、不老池、不老水が存在する。

4) 福岡県博多：名島神社があり、徐福上陸地との伝承がある。「漢倭奴国王印」が出土した志賀の島の陸側に、帆柱石と言われる石柱が海岸に横たわり、記念物になっている。徐福船団と関係があると見られるほか、豊玉彦、豊玉姫の伝承や安曇族の伝承がある。名島神社の神職・原田光雄氏によれば、徐福等は筑紫方からこちらに来て、博多湾から上陸し、名島神社境内を含む名島城跡公園一帯に竜宮城のような壮麗な宮殿を構築し留まったという。

3.2. 近畿・東海地方の徐福伝承地

1) 京都府・丹後半島：伊根の新井崎神社に徐福上陸の伝承がある。神社のすぐ近くに、徐福が上陸したとされている「ハコ岩」があり、方士徐福上陸の地の碑が建っている。しかし、「新大明神社口碑記」では、神社の祭神は童男女としている。この地にたどり着いた徐福は邑長となり、里人をよく導いたので、死後、産土神となったという。新井崎神社から遠く、冠島と杳島が見えるが、島の名は神仙思想から来ているという。

2) 紀伊・熊野：「富士古文献」によると、徐福は、渡来の途すがら三年三ヶ月、紀伊国大山に滞在したことを記念し、彼の地を開いた。「不二山」を見失いさまよった山ゆえにその山を「久真野山（熊野山）」と名付けたとある。新宮市の、熊野川下流には、徐福上陸の地と称される処があり、碑が建てられている。新宮市の大山麓には、熊野速玉神社と阿須賀神社がある。速玉とは、船の舳先に祀る玉のことを指し、船団を先導する人、即ち徐福集団の長としての徐福を表すものと考えられる。速玉神社には、速玉命とイザナミ命が祀られており、速玉命はイザナギ命を表しているようである。阿須賀神社には徐福宮がある。

三重県熊野市にも徐福伝説が残る。徐福が渡来したという紀州熊野には「不老不死の薬」天台烏薬も残っている。

3) 東海：名古屋熱田神社は、蓬萊の地と呼ばれていた。徐福集団が、富士山を目指して東遷する場合、途中で伊勢湾から熱田に回り、三河湾に入る。その地を拠点にして、先進隊が遠州から駿河に向かったと考えることができる。

4) 東三河：三河湾に面する小坂井町の菟足神社には、徐福上陸伝承があった。背景をなす、鳳来寺山の南「本宮山」麓には、紀州「古座」から移り住んだ徐福の子孫が繁栄し、秦氏を名乗っていたとの伝承がある。その子孫は全て三河に居住していたとのことである。「牛窪密談記」という書に書かれ、伊勢神宮の書庫に保管されている。

徐福は、世界の大元祖の国・蓬萊を目指して渡来し、平原、広沢を見つけてそこに、王となって留まったという。そして、その地は、不二高天原・豊葦原瑞穂の国と呼ばれたという。

まさに、東三河は、古代「豊国」「ホの国」と呼ばれ、ホウライ（鳳来）という地名を有していた。鳳来寺山は、古代の火山で、数千メートルの高さをもつ巨大な「不二山」であったと言われる。この山の南麓豊橋市には、富士王宮と呼ばれたところが、3箇所（賀茂神社、浅間神社、相本神社）確認された。つまり、東三河は「幻の富士王朝」と関係があったようだ。富士古文献の内容は東三河の事跡と対応させることができる。新城市有海に丸山・飛塚がある。大室は三河一宮、庭野にその名称が残っている。鳳来寺の本尊は薬師如来で、この地には農業、機織、養蚕についての開祖伝承や、神社・地名が数多く残っている。

しかも、豊川西岸の麻生田遺跡や水神平遺跡から、吉野ヶ里の甕棺墓と同様の甕棺墓が、300基近く出土している。この数は、九州以外の列島各地の中で最大の数である。しかも、佐賀や遠賀川式土器を出土し、北部九州と交流があったことが伺えるのである。

『尾参郷土史』の孝霊天皇の記事によれば、「この天皇の七二年に、秦人の徐福が木の国（紀伊）牛間戸に来たり、転じて参河の宝飯郡海辺、御津浜の六本松と称する所に上陸す。その風景の美、肥沃の地なるを喜び居館を築く。徐福は秦始皇帝を欺き、玉布、金銀、童男、童女を具し、官位は古座侍郎の高官たれば、三河に来たりても富栄え、我が民族もこれを尊敬し、恵みを蒙ること多く、その随行の童男女、成長して居民となり、秦氏を称す。これ東参に秦氏の多き所以なり。この民族は長山神社を建て、天地長久を祈り、その地をトコサブと云えり。蓋し徐氏の官名よりの地名となりしならん。これ三河に織物、養蚕等の早くより開けし原因たらん。後年の事なれども、三河産赤引きの糸をもって、御衣（おんぞ）の料に定め織ることとなりしも、糸質の純良なるによりてなり」とある。

『牛窪密談記』によれば、往昔秦氏 熊野権現ヲ常左府長山之郷ニ勸請ス。証誠殿相伝ノ事ニ付テ密義有り、「一座者 秦国徐氏之霊也。東海扶桑国者神仙ノ嗣系、蓬萊郡彙ノ宮城也ト聞キテ、葉求メン為ニ 艤スルト偽ッテ、ヒソカニ聖典百家ノ書、種々ノ財ヲ数船ニツンデ徐氏一族 併蘭姿伶節ノ童男兒女五百人ヲ乗セ、勅ニヨッテ海ヲ渡ルトイヒテ我ガ日本ニ来ル。徐市ハ不尽山ニメデ、駿州ニ到リ、徐明ハ 金峯山ニ入ル。徐林ハ 肥前金立山ニ住シ、徐福ハ着岸ノ津 紀州古座ニ止リ 後熊野山ニ入ル。徐福ガ孫 古座侍郎 三州ニ移リ来ル故ニ、本宮山下秦氏之者多シ」とある。

5) 富士山麓：加茂喜三著「富士王朝の滅亡」（昭和54年6月1日）によれば、人皇第七代孝霊天皇七十四年、秦ノ徐福が童男童女五百余人を従えて来麗した。「富士文献」にはつぎのように書いている。「孝霊天皇七十四年、秦徐福童男童女五百五十八人を従え不二山をめどに不二山高千火峰高天ヶ原大に來り止まりて、大室、中室に居り蚕子を養い機を織り各所に居る也。秦ノ徐福は開闢神代の始めよりの、もろもろのよろずの記録を纏め『不二山高千峰変革史』を記し置く者也」とある。先

に述べた、東三河の牛窪密談記に、徐福一行の分派が富士山に向かったことが記載されているので、徐福一行の一部が、富士山麓に足跡を残した可能性は大きい。

3.3. 関東・東北

1) **相模**：富士古文献によれば、富士山東麓から現在の神奈川県全域が、相模と呼ばれていたようだ。そして、藤沢市・妙善寺の福岡家墓碑に徐福の子孫として記載があった。これは新宮の徐福研究家・奥野利雄氏著「ロマンの人・徐福」に取り上げられている。

内容は「故人はいみ名を肅政と称し、俗名を正兵衛という。その祖先は、秦の徐福から出ている。徐福は、始皇帝の戦乱を避けて海を渡航し、我が神州（日本）まで来て、富士山の周麓に場所を選んで下り住む。それ故、子孫は皆、秦を姓とした。福岡を氏と為すものは、また、徐福の一字を取ったのである。且つ、近くの地に秦野の名があるのは、肅政の一族の旧蹟に係る。これは、祖先の地を明らかにするに十分である。我が子孫は、そのことを永く記憶し忘れてはならない。」と。これによれば、福岡家は、秦の徐福の子孫であり、渡海して富士山麓に住み着いたのち、秦野に移り、後に、藤沢に移り住んだということが伺える。

2) **秋田男鹿半島**：秋田県の男鹿には、江戸時代の紀行家・菅江真澄は「男鹿の嶋風」の中で、図絵と文章により「徐福塚」と呼ばれる石を記録している。その場所は門前の五社堂下である。男鹿市門前町には『徐福』渡来伝説が残されていた。

3) **青森・津軽小泊**：小泊地区は青森県の北部、津軽半島の北西部で北端に位置する。徐福一行の一部が北航路で対馬海流の乗り日本海を北上し、津軽半島の小泊崎に漂着したと思われる。地元では「小泊崎」を「権現崎」と呼び、遠い昔から航海の目印として、また、神々が宿る岬として信仰されている。この地では、徐福は「航海の神」として祀られている。

4) **八丈島（伊豆諸島）**：秦始皇帝の命を受け不老不死の薬草を探し求めて、童男童女5百人を乗せた徐福の船団が、八丈島、青ヶ島に漂着したという。男女が一緒に住むと神の祟りがあると恐れられ、童女は八丈島に、童男はその南にある青ヶ島に離れ住むようになった。

八丈島は、古くから絹織物を産し、黄八丈として広く知られている。秦の徐福が織り始めたという説があり、八丈島の薬草「アシタバ」は、徐福の求めた霊薬という説がある。

4. 神奈川の徐福伝承

4.1 藤沢市・妙善寺の福岡家墓碑

妙善寺の福岡家の墓碑は、徐福研究家・奥野利雄氏著「ロマンの人・徐福」（学研奥野図書、平成3年4月10日発行）、p119-121）に取り上げられている。

神奈川県徐福研究会の河野氏は、文面を写しとって研究会で紹介。徐福研究作家・池上正治氏が解説。墓碑内容は、つぎのようであった。

故人はいみ名を肅政と称し、俗名を正兵衛という。その祖先は、秦の徐福から出ている。

徐福は、始皇帝の戦乱を避けて海を渡航し、我が神州（日本）まで来て、富士山の周麓に場所を選んで下り住む。それ故、子孫は皆、秦を姓とした。福岡を氏（うじ）と為すものは、また、徐福の一字を取ったのである。且つ、近くの地に秦野の名があるのは、肅政の一族の旧蹟に係るものらしい。これは、祖先の地を明らかにするに十分である。我が子孫は、そのことを永く記憶し忘れてはならない。」 天文23年甲寅（1554年） 1月11日

これによれば、福岡家は、秦の徐福の子孫であり、渡海して富士山麓に住み着いたのち、秦野に移り、後に、藤沢に移り住んだということが伺える。

尚、筆者が、山口県に移住された福岡氏に手紙で祖先の秦野での足跡を尋ねたところ、過去帳に、先祖秦太郎可雄 寿八十三、応永二十六(1419)巳交歳八月七日に、秦野今泉村「光明寺」(現在大岳院に習合)に葬るとあった。妻千世は、応永(三十二(1425?))乙酉年四月四日、秦野村 金蔵院葬 寿百 ということである。

また、神奈川の徐福伝承を、日本で最初に紹介した奥野利雄氏は、2002年の徐福シンポジウムで次の言葉を残しておられる。即ち、徐福の子孫としてはっきりしている遺跡の伝承地は、藤沢市の妙善寺だけである。



4.2. 秦野の徐福伝承

藤沢の福岡家墓碑から、徐福の子孫の旧蹟は藤沢に近い「秦野」の地であったことが分かる。秦野の伝説を資料から探ってみたところ、果たして、徐福渡来に関係しそうな2つの伝承が存在したことが判明した。(岩田達治著「丹沢山麓 秦野の伝説」(S55.7.1))

徐福の子孫は、「からこさん」と呼ばれ、大磯から上陸して秦野に定着したという伝承、丹沢山系から降りて定着した「からこさん」の伝承である。

1) 海上ルート徐福一行?

秦野の伝説によると、「からこさん(唐子さん)は、中国からおいでになり、大磯の浜辺から秦野に移住したと伝え、徐福一行(の子孫)ではないか」と考えられている。

定着した場所は乳牛(ちゅうし、町名)とよばれ、今の秦野市中心街・本町である。かつて、唐子明神

社が存在したが、現在は郷社・曾屋神社に習合されてしまっている。該当場所は、現不動尊の南約200m付近であると言われる。

2) 内陸ルート of 徐福の子孫

秦野市の北部横野にある大秦野ゴルフ場・戸川公園の近くに、加羅古神社がある。ここにも「からこさま」に関する民話があった。「ずっと昔の昔、大むかしのことです。丹沢山塊の高峰、孫仏さま(今の塔の岳)の山頂に、からこさまが、おいでになったのです。からこさまは、里を見下ろされ、静々と山を降りられたのです。そして、やっとのこと、横野村(北地区横野)にお着きになったのです。それから、いろいろと村人のために尽くされ、とうとう神様としてあがめたまつられました。そのお宮さまが、横野の鎮守さま「唐子明神社」(加羅古神社)です」と。

富士山麓と秦野の徐福伝承のつながり

この話は、富士山麓の徐福伝承とつながりを持っていた。即ち、山梨県南都留郡山中湖村沖新田地区には、徐福の子孫の秦一族が住んでいたが、延暦19年(AD 800)の富士山大噴火で、今の神奈川県秦野市に移住したと言われている。

郷土史家・渡辺長義氏大胆な仮説

「富士山麓・沖新田地区は、徐福の子孫の秦(はた)氏一族が住んでいたところであるが、1170年前の延暦十九年、富士山大噴火で、いまの神奈川県秦野市に移住した。金印は、おそらく徐福の一行が持ってきたのではないか。」



金印の写真

この「金印」は山中湖の長生村(徐福一族が住んでいた長寿村と言われている。現在は長池村になっている)の栗林遺跡の近くの畑を羽田正次氏が耕していて発見された。

しかし、最初は「秦」と読まれて秦氏の印鑑と思われていたが、1991年に中国徐州博物館の李氏によって、中国三国志の時代の將軍の印鑑である事がわかった。読み方は「己大方」(みたいほう)と読み、三国時代の「呉」国の「黄巾軍」の大将の呼び名である。

三国志の記録によると呉の皇帝孫権は西暦230年に、徐福の子孫が住むという瀛(えい)州(富士北麓)に衛温と諸葛直に一万の兵を与え東海に繰り出し応援依頼に向かわせた。

この金印がAD 3世紀のものとなると、卑弥呼の時代と重なるので、その重要性に注目しなければならない。呉の將軍の印であることが公表されれば、今後、歴史学会でも大変注目されることになると思われる。尚、この出土地付近に徐福の墓伝承がある。

4.3. 秦野市蓑毛の大日堂の秦野由来碑

秦川勝の碑

この地が「秦野」と名付けられた由来が「秦氏」の開拓にあるとすることは、多くの人々が長い間信じてきた。それを伝える碑が、蓑毛大日堂の境内に2基と、個人の墓地になるが室町（養泉院）にも1基存在する。何れも秦川（河）勝に関するもので、大日堂境内のものは、共に川勝が五大尊（不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉）を祀るために来訪し、土着したとの伝承である。（秦野市立桜土手古墳展示館館長 星野隆夫氏による。）

秦野市室町にある養泉院（天台宗）には、秦始皇帝子孫・秦河勝の後裔（元秦野町長）と刻字された墓が存在している

秦川勝と徐福の関係

蓑毛・「法蓮寺縁起」によれば、秦野蓑毛の大日堂安置の五大尊は、印度の懼曇沙弥に顕現し、毘首羯によって刻まれたという。始皇帝二九年（BC217頃?）、沙門室利、梵語で吉祥たち18人が、秦に持ち込んだが、始皇帝は彼らを殺そうとした。そのとき徐福が彼らを救ったため、宝仏は全て徐福に遣わされた。

応神天皇十五年のとき、秦始皇帝の後裔が、本朝に持ち込み、しばらく山城に留められた。仁徳天皇のとき、やはり始皇帝後裔によって、相模の国、足柄上郡に安置されたという。そこで、この地を秦のという。そして山城の地を太秦と呼んだ。

始皇帝の後裔・秦川勝は、五大尊を祀るために、山城から秦野に来訪し、しばらく止まったと考えられる。徐福と秦川勝は、血脈関係にはないようだが、秦始皇帝の後裔が、徐福が遺した五大尊を奉じ、徐福の後を追って列島に渡来したことで、つながりをもつことになる。

4.4. 神奈川県北部の徐福伝承

神奈川県北部にも徐福伝承をもつ家系があった。そして、藤野の小淵・栗原家には伝徐福持参の鍬?があった。（稲葉博著「神奈川の古寺社縁起—知られざる伝承・霊験譚—」（暁印書館、昭和63年4月））

県北部・旧津久井郡の西端で、山梨県上野原町まで数Kmのところ、藤野町小淵に三柱神社・峰昌寺の後裔が栗原家・現当主は毅氏、に徐福縁起があった。

それによると「唐土大明神之由緒—宝暦五年十月」。「本朝第六代孝安天皇の御代、秦始皇帝、長命不死の薬を東に求め、徐福にこれを命じた。出発に当り始皇帝から肖像画を賜った。徐福は日本の九州筑紫に到着し、中国筋を経て東国に至ったものの、悪者どもが群がって到底進み得ず、止む無く本国に帰ることとしたが、折角の記念にと帝の尊像を当所の裏手、鷹取山の中腹の大岩石の下に埋めて去った、という。



4.5. 相州大山—阿夫利神社のご祭神は徐福!?

相模の人々が信仰対象としている大山阿夫利神社は、関東総鎮護の役割を担っている。阿夫利神社の

ご祭神は、山の神・大山祇神である。

大山祇神は、「徐福」をさすという説があり信憑性が高い。たとえば、須田育邦氏は、その著書「八雲立つ」で大山祇命は「徐福」であると確信して記載されている。

榎本富夫氏は、歴史研究392号(1994.1)において、千葉県葛飾郡沼南町大井の福満寺の祭神と佐賀市金立神社の祭神の対比から、**大山津見命を「徐福」と比定**されている。

大山阿夫利神社の由緒書によれば、神社創立は、今から2200余年以前(徐福渡来の時期に合致する)の人皇第十代崇神天皇の御代であると伝えられている。古来より大山は山嶽神道の根源地であり、別名に雨降山、**古名を「大福山」と**呼ばれていた。大山祇神は、またの名を酒解神(サカワケノカミ)と言い、**酒造の祖神**としてもあがめられている。また、生活の資源、海運・漁獲・農産・商工業に靈験を示されるということは、徐福の特徴をよく反映している。

碓井静照氏の著書「徐福の謎」によると、徐福一族は、各地に定着するにあたり、あらかじめ目標を定めた山(その地域で一番高い山)に立ち、海や河川を望み、最も住みやすい地を選んで山を下りたと見られる。これが後に、土地の人々において、神の降臨伝承となった可能性が高いという。また、磐楠船が八十鶴によってかきあげられ、ご神体の一つになっている。これは徐福一行が乗った厳めしい船のことでないか?(注1:徐福は、富士吉田の伝承では、没して鶴になったとつたえられており、鶴に連れられて降臨)した鳥之石楠船命は、徐福の子孫ということになる。

4.6. 相模の一宮・寒川神社のご祭神も徐福か

相模川の河口近くの高座郡に、相模国一宮となる寒川神社がある。寒川神社の社誌付録に「宮下文書」が付いている。その中には、ご祭神の寒川比古命は、大山祇命であるとしている。また、寒川姫命は、別雷、加茂澤姫命であり、その娘・菊理姫は、いみなコノハナサクヤヒメという。大山祇命が、「徐福」を表すものとすれば、寒川神も徐福ということになる。富士古文書に関する伝承が残っており、富士・高天原の川の名にちなんで寒川神社を創建し、伝来の文書を保管したという。

宮下文書の記事 (相模国寒川日記録第43巻 宮司宮下減太夫義仁)

人皇五一代桓武天皇延暦十九辰年三月始め、福地山より熱湯72箇所より焼出し、人馬限らず、草木まで皆滅す。

別当行満寺丹波丹治比高座郡牧の沖に住居なり。此れは大山祇命の遠孫なり。福地山の中央大室の地より、3百余人伊勢参宮の者ともに途方にくれ悔む。同二三年申年三月七日、勅命にて古郡川辺に寒川神社を建立し、この祭神大山祇命より、国狭槌尊までの先祖代々を祭る。応神天皇明仁政元2皇子並びに、木花咲夜姫尊を合せ祭る。

国狭槌尊は即ち農狭という人である。**大山祇命は即ち寒川比古命**という。

寒川姫命はいみな別雷ともいい、加茂澤姫命という。**寒川比古寒川姫の娘菊理姫はいみな木花咲夜姫尊**という。東北国にては、天照御神と唱え称す。

明仁親王日本想山を司取るによりて、いみな山守王命という。中略 福地山中央大室の原を神都と唱すなり。**大山祇命は、寒川比古命であり、かつその子がコノハナサクヤヒメである**という。

4.7. 丹沢山系は、徐福一行の靈薬探索地?

富士山東麓の道志川の伝承は、大山が徐福一行の開発であることを証言

江戸時代に大山講を通じて大いに賑わった基点になったのが伊勢原町であるが、「伊勢原町勢誌」 p 132には、次のような記載があった。

「大山の山岳信仰に関連して、山梨県の道志村に残る伝説で、秦の徐福が蓬莱山なる富士に不老不死の仙薬があると聞き及び、五百人の童男童女を使わして求めたけれども得ること難く、たとえ幾年ついやそうともこの秘薬を手に入れぬ内は、帰国を許さずと厳命した。やむなく**五百人の使者は土着して、相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山・地藏ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を、神仏に祈り探して、この地を蓬莱山と呼んだ。しかしめざす仙薬は遂に見当たらず、五百人の男女はここに帰化してしまった。**」

つまり、徐福一行は、リーダー徐福の厳命で、不老長寿の仙薬を求めて、秦野に移住し、蓬莱山と呼んで帰化してしまった。

4.8. その他神奈川県内の徐福関連の地名等

1) 秦野の地名と遺蹟

秦野：秦野市を含む周辺は、古代「幡多郷（はたごう）」といわれるように、秦氏族と深いかわりがある。相模川上流の猿橋町秦野の八幡も相模の秦野に由来するという窪田薫、富士北麓の秦氏二重構成説、秦武栄「徐福ロマン」特別寄稿）。

秦野市は、秦河勝の一族が移住し、この地を開発したとも伝えられている。

2) 伊勢原、平塚（史記に述べる徐福の止まるところ、平原広沢）

日向薬師：伊勢原市日向に、大化元（646）年開創と伝えられる日向薬師があり、山門下に境内社として秦氏族の祀る白髭神社がある。

広沢寺：七沢にある武田氏による建立寺。平原広沢に由来。

3) 相模（さがみ）

この名称も、サ・カミつまり「山の神」や「農耕神」を意味するという説がある。日本の徐福伝承には、徐福は人々に農耕を教えたとあり、伝承地の多くが徐福を「農耕神」として祀っている。サガミの神も「徐福」を表しているのではなかろうか。

4) 丹沢：徐福一行が捜し求めた、丹（朱、辰砂）の採れる山、沢を意味している。

平原広沢の沢は丹沢とも解釈できる。金達寿氏は、古代韓国語の深い谷間の意味で、沢も深谷の溪流をさす、というのが、徐福一行が神仙の霊薬として求めた、辰砂と考える方が妥当。

5) 神奈川

東海道名所図絵には、それ神奈川という名は、昔、大足彦忍代別天皇（景行天皇）40年6月、東夷反逆の由、日本武尊東国安泰すべしとの詔で、当地にきたとき、宝剣が前の川の水底に映り、金色の光をなしたので、この地を金川と号した。その後、源頼朝が関八州を巡視されたとき、金川に泊まり、金は西を司り、西即ち上に当たって皇域である。神大いに示す地であるということで、神奈と改められた。神流川（かんながわ、群馬にある）と同じ意味か。

4) 蓬莱

蓬莱町：横浜市中区に蓬莱町がある。

ほうらい：秦野市本町下流の室川には、ほうらい橋がかかっている。付近には、ほうらい公園、ほうらい会館、ほうらい児童館などが建てられている。

5) 大住郷

大住郷：伊勢原から秦野にかけての古代地名。王住郷とも考えられ、史記の徐福が王となって止まるといふのに対応するかも知れない。 秦野の隣・平塚には高間原と呼ばれた地があった。

6) 三浦半島の秋谷地区の丸石は、徐福が持ってきた!!

赤埴和晴氏の説であるが、神奈川県三浦半島の西岸、横須賀市秋谷の道端の安産祈願の球形の「子産石」が置かれている。この地域に集中して丸石が埋まっていることから、座礁船のバラストであると見ている。古代の外洋構造船としては、徐福一行の船によるものではないかという訳である。

7) 丹沢の前山の「シダンゴ(ウ)」山は、徐福文献に載る「支那震旦国」の由来を示す山と伝えている。富士古文献に出てくる、徐福一行は、古代中国「支那震旦国」から渡来したことになる。

5. 神奈川(相模)に関連する徐福伝承を伝えた人々

神奈川に存在する徐福伝承は、どのような人々によって伝えられたか考察したい。

- ① 妙善寺の福岡家の墓碑は、富士山麓に土着した徐福の子孫と自称する家系の人が、秦野に移り、更にAD1400～1500年ごろに藤沢に移り、墓碑を残している。
- ② 藤野町の徐福持参の木像や鉄鍬は、徐福伝承をもつ上野原から富士吉田の徐福伝承が、AD750年ごろに、奈良から藤野に移住した貴族・栗原家が伝えてきた。
- ③ 秦野市蓑毛・宝蓮寺大日堂に伝えられた五大尊は、応神天皇の時代(AD400?ごろ)に中央アジア出身の弓月の君集団が秦氏(始皇帝の子孫)として渡来し、持参して、京都、駿河、秦野にもたらされた仏像の一部という。
- ④ 鎌倉円覚寺は、熊野新宮に徐福関係の漢詩を残した禅僧・無学祖元(1279-1282)の開山寺である。その弟子・高峰顕日(1316頃)が、秦野の宝蓮寺の中興の祖となっている。
- ⑤ 日本の徐福伝承(富士山関係)を中国に伝えたのは、弘順大師賜紫寛輔で、『魏楚六帖』(958)に掲載された。この人は、興福寺の僧侶寛建の従僧として渡海した真言密教の僧侶である。
- ⑥ 日本の真言密教の開祖は空海(弘法大師)である。空海は、遣唐使として唐に渡り、帰国するとき、師匠から徐福によろしくと言われたという話がある。平塚の弘法山薬師寺には、空海が巡錫(AD806頃)したという記録がある、大山寺の3代住職は空海であった。空海は、この地で徐福伝承の詳細を知り、真言密教の後輩僧侶に、徐福伝承を伝授し、弘順大師が中国に富士山に存在した徐福伝承を伝えたと考えられる。
- ⑦ つまり、神奈川の徐福伝承は、応神天皇の時代以前から存在した古代からの情報を含むと考えられる。

6. まとめ・徐福は倭国(古代日本)に何をもたらしたか

1) .日本列島における徐福集団の動きについて、徐福集団は、九州に上陸、各地で分隊を残しながら、瀬戸内海と日本海側ルートに分かれ、主力隊は、熊野、三河に到着した。主隊の徐市は駿河を經由し、富士山麓へ達し、その後、秦野、藤沢を含む関東平野(平原広沢)へと広がっていったと考えられる。徐福は日本の「風土記」に登場の「フツ主」と表現されている可能性がある。

2) 徐福は日本の各地で大神として祀られている。例えば、徐福は伊弉諾神や素佐男命を反映しているといわれる。その神名は、大山祇、速玉男、八千矛、牛頭天王、タカオカミ、雷、カグツチ、ホムスビと呼ばれている2)。徐福集団がもたらしたものは、五穀を含む農業、捕鯨を含む狩猟、植林、絹織物の製

造、酒造り、金や朱の鉱山開発、青銅、鉄などの製造、薬草の判別、不老不死の仙道思想、イワクラ信仰、甕棺墓や前方後方・後円墳の考え方、国モデルの形成などが挙げられる。その他、神武天皇、ニギハヤヒ命、熊野権現などに比定される例があり、日本の国家形成の原点を徐福一行が担った可能性がある。邪馬台国問題は、徐福の事跡と考古学的追及により解明されると思われる。まとめると、**徐福集団は、日本神話の神々となっているが、日本列島に於いて、倭国の国造りの基礎を築いたと思われる。**

参考文献

- 1 前田豊：「徐福と日本神話の神々」（彩流社 2016.1.15 発行）
- 2、高畠麒四郎著、「古代天皇系譜の謎」、夏目書房p39